



# 東京オリ・パラが コロナ禍からの レジリエンスに貢献

在仏コラムニスト 安部 雅延

## ヴィジョンは不動のはず

世界は東京五輪・パラリンピックをどう見ているのか。日本国内に開催中止派が多かったことや、コロナ対策で無観客になったことなどは、実は海外では当然として理解されている。開催の有無を最後まで議論したことも異常とは捉えられていない。

コロナ禍の異常な状態なのだから、理解できないわけではないからだ。それより、この異常事態でオリンピック・パラリンピック（オリ・パラ）を開催できる実力があるのは、世界でも日本くらいしかない、という声はよく聞かれる。

今後2度とオリ・パラはやるべきではないという日本の識者もいるが、危機をチャンスに変える機会を経験したことを、むしろ感謝すべきではないだろうか。ただ、この経験から学ぶことを整理し、未来に生かす学習能力は絶対に必要な。

その最も注目すべきは、日本人の最大の弱点ともいえるべき「手段が目的化する」ということが起きた問題だ。それもオリ・パラの中心的役割を担う組織委員会で起きたのだ。個々の事例は

ともかく、五輪憲章にある根本理念やヴィジョンが軽視されたことが最大の反省点だと私は考えている。

通常、オリ・パラには2つのヴィジョンがある。1つは五輪憲章でスポーツを通して世界平和の実現に貢献するというものだが、年々進化している。2つ目は各開催国が誘致の際に定めたヴィジョンであり、コンセプトだ。両者には整合性が求められ、五輪が持つ価値観と精神が、個別の五輪コンセプトにも反映されるべきとしている。

ところが、このヴィジョンやコンセプトを軽視しがちな日本では、状況に応じてコンセプトも、臨機応変に変えられると考えている節がある。これがキリスト教文化のような絶対的価値観や世界観によって動く文明には属さない日本が持つ特有の考えだ。状況によつて根本理念も変化させ、あるいは無視できる間違った考えだ。

いったん定めたヴィジョンや価値観は触つてはいけないものであり、その変更には大きな議論が必要というのが一神教の文化圏に属する国々の価値観だ。これは企業運営にも反映されており、どんなプロジェクトでも最初に定めるヴィジョン、コンセプト作りに多

大なエネルギーと時間を掛ける。

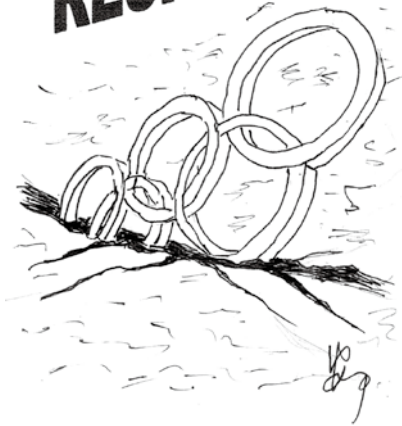
抽象的ヴィジョンやコンセプトは具体化が可能かどうかも含めて議論される。しかし、状況が変わっても、めつたにヴィジョンに手を触れることはしない。それにヴィジョンはただの掛け声や飾りでは決してない。逆に言えばプロジェクトがとん挫した場合、最初のヴィジョンに遡つて検証される。

無論、近代五輪の道を開いたフランス人のクーベルタン男爵の定めた根本理念は、時代とともに慎重に検討を重ね、進化してきた。事実、クーベルタンは女性の五輪参加に否定的だった。IOC委員の最大の仕事は、時代とともに浮上する新たな課題について、根本理念を具体化する道筋を慎重に検討し、修正を加えることにある。

そこには哲学的、普遍的な思考が必要であり、単にスポーツに精通した経験豊かな、あるいは途上国のように、利権が絡んだ人材が委員になるような場所ではない。無論、現実にはIOC内の汚職を含む腐敗が、特に1984年のロサンゼルス五輪の時に大きく商業化して以降、課題となっている。

それでもオリンピックズムは普遍であり、その根本理念を軽視した開催は許

# RESILIENCE



されるべきではない。ところが今回の東京オリ・パラの組織委員会は当初から根本理念無視が目立った。人材選定の過程で、理念にそぐわない人材は排除されるべきだったし、とりわけパラリンピックは、身障者を差別する人間は関与できないはずだった。

## 分断の時代の五輪の存在価値

逆境を押しつけ、危機をチャンスに変えることに価値を置く日本人は、東日本大震災からの復興五輪というコンセプトに共感した。ところが、人類が等しく経験しているコロナ禍でも、オリ・パラを開催できるというところを見せたいと目的は変化した。

成功の影に苦勞があったというス

トリーは日本人が最も共感するものの一つで、今回は公衆衛生上の危機の克服がストリーとなつていて。日本は非常に少ない感染者や死亡者数を世界に誇つていて。日本人は法的拘束力がなくとも、高い倫理観でルールに従つて克服していると言いたげだが、そのインパクトは薄い。

ある知人の香港人は「日本のハンコ文化は、高い信頼性で成り立っており、簡単に偽造できるのに通用してきた。しかし、グローバル化が進めば、ハンコ文化のリスクは倍増していく。日本は世界のことがかつていない」と言っている。

デジタル化でハンコを減らそうとしている日本だが、リスクマネジメントが最大の理由になつてはいいない。苦勞話

の大好きな日本人が逆境を乗り越え、世界に日本の素晴らしさを発信するという考えは、自己満足的で時代遅れというしかない。

コロナ危機が数年の間に落ち着くこと

は、過去のウイルス流行でも証明されている。世界が本当に直面している問題は、対立と紛争、分断が世界のそこ彼処で確実に進んでいることだ。東京オリ・パラが残せるレガシーは、スポーツを通して人類の一体感によって、少しでも対立や分断を軽くし、世界平和に貢献すること以外にない。

だから、重要なのは五輪効果の再検証にある。国威発揚や経済効果は商業五輪がもたらしたもので、根本理念ではない。

その意味では100年前、第1次世界大戦直後、スペイン風邪のパンデミックも収まりきららない中、1920年に開催されたベルギーのアントワープ五輪は、近代五輪が始まって24年後の試練だったが、大いに参考になる。

ベルギーは歴史的に戦争で戦場になることが多い国だが、第1次世界大戦で焦土と化したベルギーでの五輪開催は、いくつもの課題を抱えていた。ところが、国民が一致団結してスタジアムを建設し、結果的にベルギーの再建に大きく貢献をした。

日本は前回の東京オリ・パラで第2次世界大戦の敗戦からの復興を世界に示すことに成功し、高度経済成長に

弾みが付いた。今度は東日本大震災からの復興と想っていたら、コロナ禍に襲われ、前代未聞の無観客で、なおかつコロナ禍は完全終息には程遠い状況だ。

とはいえ、オリ・パラの最大効果はスポーツを通して、地球上に住む人々が日頃の政治的対立や分断、差別を忘れ、国籍も人種も健常者や身障者も関係なく、フェアな戦いの場を提供することで、地球規模の共感を得ることにある。決して経済復興のバネになることが主目的ではない。

商業主義に走りすぎて、その崇高な目的を忘れてしまい、ビジネス化した五輪は存在意義を失いつつある。個人人は米国が持ち込んだ商業主義に真っ向から反対するつもりはないが、米国と同じ、公正な土壌のない世界では毒になりうる可能性もある。

日本人は普遍的価値を追求することは苦手だが、対立や分断、差別に対して和の精神を適応させることはできる。今回の五輪は損得を度外視し、五輪本来の目的に回帰するレジリエンスでレジエントになり、特にロンドン・パラリンピックに負けないパラリンピックにもなつてほしいものだ。